

◇第11期研究テーマについて

1 研究テーマ（全体）

自立する力をはぐくむ学びのつながり

～個と集団の学習場面を通して、「深い学び」を実現する授業づくり～

2 研究テーマ設定の理由

【学校教育目標】

自らの力をじゅうぶん発揮し、主体的に取り組む生活を今と将来にわたって実現する児童生徒の育成

私たちが大切に 考えていること

私たちは、「児童生徒が、主体的に活動し、自らの力をじゅうぶん発揮しながら生活をすることによって、一人一人の自立がはぐくまれる」と考えている。また、「児童生徒の現在の生活が充実し、その充実した生活が繰り返されることによって、より豊かに生きるうえで必要な力（自立する力）が自ずとはぐくまれ、将来の生活もより充実した豊かなものになる」と考えている。そのために児童生徒の興味・関心や願い、伸びている力などに目を向け、主体的に生活に取り組むことができるように支援をするとともに、共同生活者として児童生徒とともに生活する教師の在り方を大切にしている。

自立する力

一人一人が物や身近な人、集団、社会とかかわりをもちながら、日々の生活の中で目当てに向かって自分の力を最大限に発揮して生活する力

これまでの 私たちの取り組み

本校では、これまでの研究を通して、「何を」「どのように」「誰と」学ぶのかということを追究してきた。

「何を」「どのように」の部分を示すものとしては、第8期研究の取り組みを基に、作成してきた個別の指導計画がそれに当たる。私たちは、一人一人の児童生徒の現在の姿や実態から伸びている力を捉え、共通の目標（卒業後に期待する姿）や今年度の目標を設定している。そのうえで、児童生徒が「何を」学ぶのかということを明確にし、各授業での支援を計画して、「どのように」学ぶのかを考えて授業づくりに取り組んでいる。

第10期研究では、「誰と」「どのように」学ぶのかということが、さまざまな「場」でさまざまな「ひと」とともに、今と将来にわたって主体的に取り組む生活を実現していくための大きな環境になると考え、「ひと」とのつながりがはぐくまれる授業づくりを追究してきた。第10期研究を通して、以下のような成果が得られた。

① はぐくまれた『ひと』とのつながり

- ・身近な教師とのつながりがはぐくまれることにより、ほかの教師、友達、目の前にいない「ひと」とのかかわりに広がっていくことが見えてきた。

② 「ひと」とのつながりがはぐくまれることにより、「ひと」を意識して、より主体的に活動に取り組む姿

- ・小学部では、同じ遊びを繰り返したり、新たな遊びに取り組んだりする姿。中学部では、自分で工夫して活動に取り組む姿。高等部では、具体的な目標を自分で設定して意欲的に取り組む姿として捉えることができた。

※ 「平成27年度第10期研究のまとめ（全体）」より抜粋

平成28年度は、本校の今までの研究における取り組みを振り返り、第11期研究テーマ設定に向けて取り組む内容を考える期間として位置付け、検討を重ねてきた。ここで、これまでの「何を」「どのように」「誰と」学ぶのかについて追究してきた私たちの取り組みを振り返ったときに、特に、「何を」「どのように」学ぶのかについて下記のような課題が見えてきた。

【個別の指導計画の活用に関わって】

- ・ その子にとっての自立とはどのような姿なのか、どのような過程を経て自立する力がはぐくまれるのかといった学びのつながりを見据えて今年度の目標を設定すること。
- ・ 設定した今年度の目標を基に、生活・作業単元学習、PLUS、日常生活の指導といった各授業間の学びのつながりを意識しながら、生活づくりを構想し、授業づくりを行うこと。

特別支援学校教育要領・学習指導要領解説総則編（2018）では、

- ・ 単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、児童又は生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うこと
- ・ 各授業や個別の指導計画の計画（Plan）－実践（Do）－評価（Check）－改善（Action）のサイクルの中で蓄積される個々の児童生徒一人一人の学習評価に基づき、教育課程の評価・改善に臨むカリキュラム・マネジメントを実現する視点が重要

と挙げられている。つまり、個別の指導計画を活用し、児童生徒が「何を」学ぶのかという学習内容だけでなく、「どのように」学ぶのかということに着目して、児童生徒が学習する過程の質を高めていくことが重要であり、さらには学習評価の充実を図るために、組織的・計画的な取り組みや、学習の成果が円滑に接続されるような工夫が求められていることが分かる。

個と集団

上記の課題を受け、平成28年度二月授業では、PLUSを主な授業場面として取り上げ、事例生の今年度の目標を基に生活づくりを構想し、生活・作業単元学習、PLUS、日常生活の指導、各教科等の学習といった各授業の関連を図りながら授業づくりを行った。その実践から分かってきたことは以下のとおりである。

- ・ 児童生徒がPLUSで学んだことを、生活単元学習や日常生活の指導などそのほかの授業場面に生かす姿が見られた。児童生徒がPLUSで学んだことを生活単元学習やそのほかの授業場面で生かすことをねらいとして生活づくりを構想することができそうである。
- ・ 生活づくりを構想する際に、PLUSや生活・作業単元学習、それぞれの授業の特徴や授業形態を踏まえ、その授業場面でのねらいを明確にして支援を計画することが大切である。

※ 「平成28年度二月授業のまとめ（全体）」より抜粋

それぞれの授業には、その学習形態や題材ならではの特徴がある。例えばPLUSは、児童生徒のできることに、伸びている力、得意なことなどを手掛かりに、一人一人の伸びている力がさらに伸びることを願って教師と密にかかわりながら行う個別の学習である。また、生活単元学習は、実際の生活から発展し、児童生徒の興味・関心、発達段階などに即して行う活動であり、個人差の大きい集団にも適合するものである。さらに、その中で一人一人の児童生徒が力を発揮し取り組むとともに、集団全体が単元活動に共同して取り組めるものであることといった特徴がある。平成28年度二月授業の取り組みを通して、どの授業においても個の学習場面と集団の学習場面が存在し、それぞれの特徴やよさを授業づくりをするときに取り入れることが大切であることが分かってきた。

個の学習場面は、落ち着いた環境の中で安心して教師と密にかかわりながら活動できたり、自分

の願いや興味・関心のあることをじっくりと追究できたりする。また、集団の学習場面には、自分とは違う遊び方や作り方、見方・考え方との出会いがあったり、自分にはない知識や経験、技術をもったひととの活動ができたりするというよさがある。

個と集団の学習場面の特徴やよさを踏まえたうえで、児童生徒の今年度の目標を基に、その時期の生活づくりを構想し、授業づくりのなかで個と集団の学習場面のそれぞれのねらいを明確にして支援を計画していくことにより、児童生徒が、「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解する、情報を精査して考えを形成する、問題を見いだして解決策を考える、思いや考えを基に創造するといった「深い学び」の実現につながるのではないかと考えた。

深い学び

特別支援学校に在籍する児童生徒の実態は多様化しているため、さまざまな児童生徒の複雑な様相に対応できる「深い学び」の視点を整理し、あらかじめ構想しておくことが多様性に対応するうえでも重要であると考え。そこで「深い学び」を「般化」「高次化」「統合化」という三つの視点（武富・松見、2017）で捉え、授業づくりに生かしていく。それぞれ三つの視点の概念は以下のとおりである。

般化	・学んだことを多様な場面に結びつけていくこと
高次化	・学習内容が数的、質的、量的に高まること ・関与する人的・物的環境の変化や情報量、支援の量が変化すること
統合化	・幾つかの学習場面で学んだことの共通点を見だし、それらを相互に関連付けて活用し、考えをまとめたり、発展させたりすること

これまでの研究授業を通して、事例生の「深い学び」の具体的な姿が見えてきた。

中学部事例生Iさんは、個の学習場面においてカードを使って伝える、動作で伝える、動作とともに声を出して伝えるなど、身近な教師と伝え方について学んだことにより、自分の思いが伝わる楽しさやうれしさを実感し、集団の学習場面でも近くの教師や友達がIさんにかかわったときに自分から声や動作で応じるようになった（般化を視点にして考察）。

小学部事例生Nさんは、個の学習場面においてNさんの興味・関心に即した動きを教師が先行したり、Nさんと動きをまねして活動したりすることにより、一緒に活動している教師の存在が身近なものになり、自分以外の人の遊び方や動き、様子を見て、「僕もあのように遊んでみたら楽しそうだ」と考え、集団の学習場面で教師や友達の様子を見て、自分も同じ遊び方で遊ぼうとする姿につながった（高次化を視点にして考察）。

高等部事例生Sさんは、個の学習場面でマジックをする自分の姿をタブレット端末で確認することにより、そのときに取り組んでいたマジックの手元の位置が以前に覚えたマジックの手元（見ている相手からは見えない）の位置と同じであることに気づき、「これなら大丈夫です」と教師に伝える姿が見られた。また、集団の学習場面ではマジックショーを見てもらい、意見をもらう場面を設けることにより、以前に取り組んだアラジン劇での経験を思い返し、「ジーニーの衣装を着ます」「ランプをこすってから登場してマジックをします」ともらった意見と今までに経験したこととの共通点を見だし、マジックショーの演出についての考えを教師に伝える姿が見られた。個と集団それぞれの学習場面を通して、自分の姿や相手の姿から自分を振り返ることにより、幾つかの学習場面で学んだことの共通点を見だし、それらを相互に関連付けて活用し、考えをまとめたり、発展させたりする姿が見られた（統合化を視点にして考察）。

以上のような三つの視点を授業づくりに生かすとともに、児童生徒の姿から「深い学び」を考察する。

学びのつながり

授業を通して生まれた児童生徒の学びは、単にその授業やその時期での学びとして独立したものではなく、各授業間や学期間や学年間はもちろん、部間を越えてその先の生活へつなげていくことが自立する力をはぐくむうえで大切であると考えます。

特に部間移行の場合、これまでの学びを基に移行先において期待する姿について、部間の教員、保護者、地域の支援者間で共有しながら支援に当たり、移行先における学びへとつなげていきたい。

児童生徒の今年度の目標を基に、個と集団で学ぶそれぞれの場面のねらいを明確にして支援を計画し、児童生徒が「どのように」学ぶのかを構想して授業づくりを行い、児童生徒にとって現在の生活をより充実したものにしていく。その生活の中で得られた学びを、その先の生活につなげていく。児童生徒の自立する力をはぐくむためには、前の時期の学びを次の生活につなげていく学びのつながりが大切であると考えます。

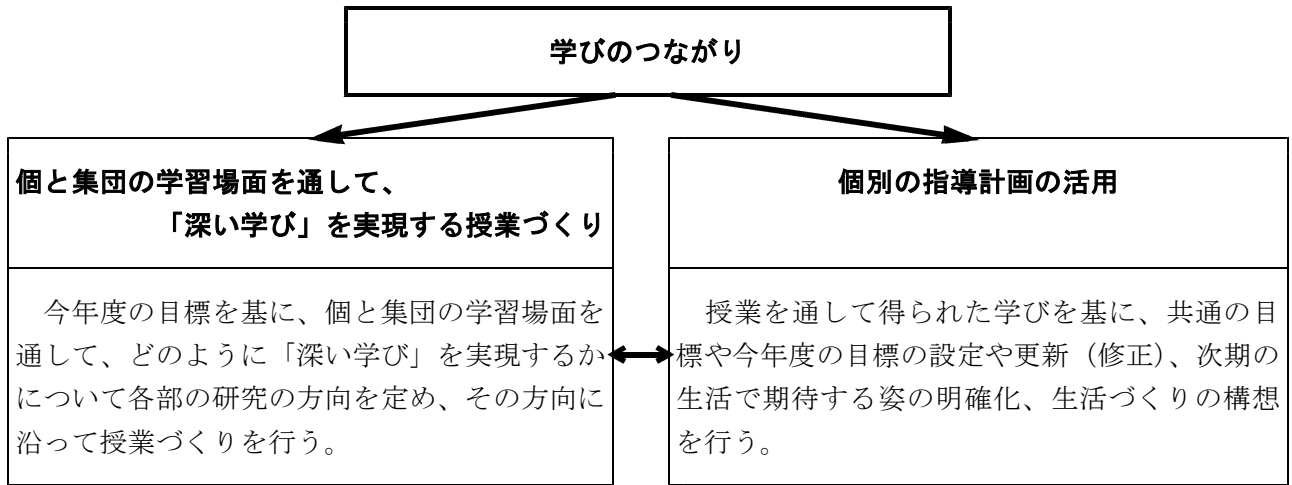
以上のことから、児童生徒の自立する力をはぐくむために、個と集団の学習場面を通して、「深い学び」を実現する授業づくりにつながる児童生徒理解の在り方、環境の整え方、学びの捉え方、学びのつながりを具体的に追究するため、第11期研究テーマを「自立する力をはぐくむ学びのつながり～個と集団の学習場面を通して、『深い学び』を実現する授業づくり～」と設定した。

3 研究の仮説

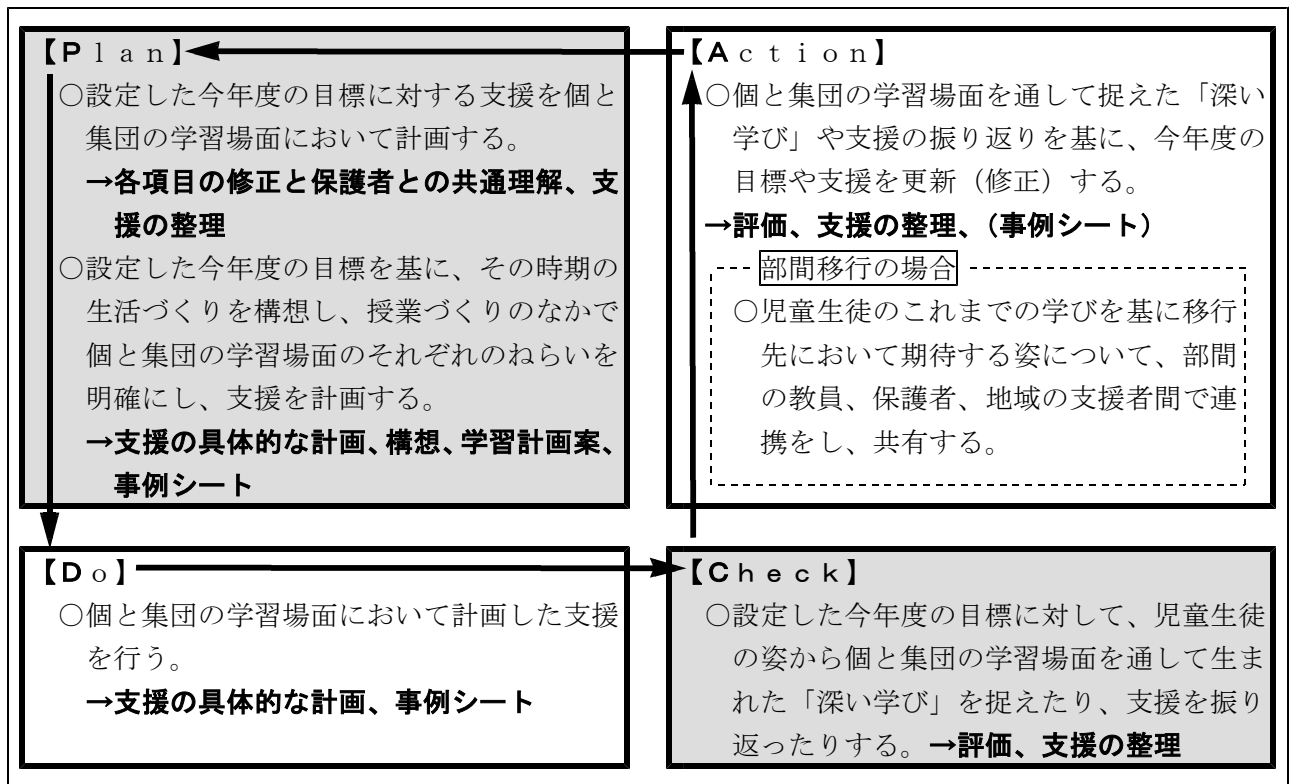
- 児童生徒の今年度の目標を基に、その時期の生活づくりを構想し、授業づくりのなかで個と集団の学習場面のそれぞれのねらいを明確にして支援を計画し、各部の研究の方向に沿って環境を整えることにより、「深い学び」の実現につながるだろう。
- 授業を通して得られた学びを基に、個別の指導計画の作成の在り方を検討しながら児童生徒の学びをつなげていくことにより、自立する力がはぐくまれるだろう。

4 研究の内容

児童生徒の自立する力をはぐくむ学びをつなげていくために、「個と集団の学習場面を通して、『深い学び』を実現する授業づくり」と「個別の指導計画の活用」の二つの視点から捉える。



学びのつながりについては、以下のようなPDCAサイクルを通して具現していく。このPDCAサイクルは、個別の指導計画を通して、児童生徒の学びに応じて、日々の授業づくりにおいてはもちろん、学期間、学年間、部間といった期間の中で行う。



児童生徒の自立する力をはぐくむために

- (1) 個と集団の学習場面を通して、「深い学び」を実現する授業づくりの在り方を追究する。
 - ① 個別の指導計画に基づき、各部の研究テーマに沿って、児童生徒の興味・関心や願い、伸びている力を捉える（児童生徒理解の在り方）。
 - ② 児童生徒理解に基づき、各部の研究テーマに沿って、個と集団の学習場面を通して「深い学び」を実現する環境を整える（環境の整え方）。
 - ③ 児童生徒の「深い学び」を三つの視点から捉える（学びの捉え方）。
- (2) 個別の指導計画の作成の在り方を検討し、学びのつながりについて追究する。

引用文献

- 分藤賢之 (2017). 小学部・中学部 (総則) の改訂の要点. *特別支援教育*No.66. 東洋館出版社
- 文部科学省 (2018). 特別支援学校教育要領・学習指導要領解説.
- 信州大学教育学部附属養護学校障害児教育研究会 (1986). 研究紀要17自立する力をはぐくむ生活の創造. 信州大学教育学部附属養護学校
- 武富博文、松見和樹 (2017). 知的障害教育におけるアクティブラーニング. 東洋館出版社

(文責: 原 洋平)